

陰陽ちゃんぽん暦で多文化を生きる (特集 マルチな暦を生きる : カレンダーにみる在日外国人のくらし)

著者	陳 天璽
雑誌名	民博通信
巻	109
ページ	8-9
発行年	2005-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10502/5250



春節祭の獅子舞。(横浜中華街)

陰陽ちやんぽん暦で 多文化を生きる

陳天璽 文・写真
ちんてんじ

先端人類科学研究部助教授。
無国籍者、ディアスポラなど移動・移住者と、国籍、
国境、グローバル社会のダイナミズムを研究。
著書に『無国籍』（新潮社、2005年）、『華人ディア
スポラ——華商のネットワークとアイデンティティ』
（明石書店、2001年）、論文に「グローバル時代
に求められる新しいアイデンティティ」（『世界と議
会』2003年）などがある。

清明節と在日華僑華人

線香の香りが立ち込めるなか、家には家族や親族たちがたくさん集まっている。祭壇の前の大きな円卓には鳥、魚、肉、そして野菜や果物などが並べられている。数々の料理が供えられている円卓の周りには、いくつもの座席が用意され、各席の前には、それぞれお酒、お茶、そしてご飯、皿や箸などが並べられている。あたかもお客様がやってくるのを待ち構えているかのように、準備万端だ。しかし、待てども待てども「お客様」がくる気配はない。

そんな席が並べられた大きな円卓に向かって、家族たちは代わる代わる火が点された赤いロウソクから、長い線香に火をつけ、それぞれ手を合わせて祈りを捧げる。在日華僑華人の家庭で行われる清明節の様子だ。

円卓は祖先へのもてなしである。子孫たちは、祖先を「あの世」から「この世」に招いているのであり、用意された席には祖先たちがやってくると考えられている。また、子孫たちは祖先たちを「招く」ために、墓参りをする。私が育った横浜にある中国人墓地「中華義荘」は、清明節になると、墓参りにくる家族たちでにぎやかになる。家族たちは祖先の墓を清掃し、事前に用意した銀箔や金箔の紙を一枚一枚折って作った「元宝（中国の昔の通貨）」を燃やし祖先たちに送る。冥界で不自由しないようにとの思いが込められている。近年は、冥界用のお札、クレジットカードや携帯電話、また「この世」に戻る際に必要であろう航空チケットや冥界パスポートなどを「送る」家族もいる。

中国の祭事を日本で味わう

この一連の祭事を、我が家では「^{パイフッシャエン}拜祖先」という。祖先を拜むという意味だ。ちなみに我が家では、清明節（陰暦3月3日）だけではなく、中元（陰暦7月15日）、冬至（陰暦11月10日）、除夕（春節の前夜）と年に4回、必ず「拜祖先」をしている。こうした日がくるたびに、家族たちは陰暦の節目が訪れたことを、実感するのである。

通常、華僑華人の家には、陽暦に付随して陰暦や中国の歳事が記されたカレンダーが必ずといってよいほど、各家庭の壁にかけられている。また、華僑華人たちが経営する中華料理店、そして各店舗に食材を卸している会社などは、年末のお歳暮や宣伝もかねて、カレンダーを配ることが多い。そうしたカレンダーのなかでも、中国の年画（干支や神など縁起の良い画）や陰暦を記しているものが特



清明節のための冥界用のお札。



中国食材を扱う東京の会社が配った暦。陰暦と陽暦が併記されている。



町内会のおみこし。「中華街」の名が入った揃いの法被を着ている。

に好まれる。陰暦は、華僑華人たちのくらしのなかで脈々と息づいているからであろう。

それは彼らが行っている祭りからも垣間見ることができる。横浜、神戸の中華街で行われる春節祭は陰暦の正月を祝い、街では爆竹が鳴り響き、獅子舞や龍舞が踊られる。長崎でも一大イベントとして知られるランタン・フェスティバルは中国の元宵節（陰暦1月15日）にちなんでいる。それ以外にも関帝誕（陰暦6月24日）や中秋節（陰暦8月15日）など、元来、華僑華人のあいだで静かに祝われていたものが、今では中華街の祭りとして大々的に行われるようになり、しかも多くの観光客を呼び寄せている。その結果、華僑華人でない人たちも一緒に中国の祭事を祝うようになり、多文化多民族の共生が陰暦を通じて実現している。

ふたつの「時間」の合流

在日華僑華人たちのくらしには、つねにふたつの時間が流れている。ひとつは陽暦の時間。毎日カレンダーやスケジュール帳で眺めるようになった太陽暦を基にした時間である。もうひとつは、すでに触れた陰暦の時間である。

華僑華人たちは、中国に伝わるさまざまな祭事を移住地においても大切に守り、陰暦にそって執り行っている。また彼らは、移住先の隣人たちとともにその土地の伝統行事を行っていてもいる。また、日本の華僑華人たちは、日本の祭事だけでなく、日本で広く祝われているクリスマスやバレンタインなど、西洋から伝わった新暦のイベントも当然のように祝っている。

華僑華人の子どもに目を向けると、そうしたふたつの暦、ふたつの流れが、彼らのくらしの中にごく自然に根づいているのが分かる。子どもは、毎日時間に追われている大人とは裏腹に、暦にそった各種の祭りやイベントを最も楽しみにしている。彼らには、一年をとおりイベントが目白押しだ。華僑学校の行事も日中、そして陰陽双方の暦の祭事に沿っている。

たとえば、正月だけでも年に2回は祝う。陽暦はおせち料理を食べ、コマまわしや凧揚げをして遊ぶ。陰暦の正月「春節」は、家族でたくさんの餃子を包み、ひとつだけお金を忍ばせた餃子にあたった人は、その年運が良くなるといわれ「紅包（お年玉）」をもらう。元旦には鏡餅を飾り、お雑煮やおしるこを食べたりするが、春節には、黒砂糖で作られた中国のお餅「年糕」を食べる。

春節からまもなくするとひな祭りを祝う。そして4月4日、5月5日と続く中国と日本の「こどもの日」を2倍満喫する。陰暦の5月5日になると端午の節句を祝い、ちまきを食べる。夏になれば、近くの公園で行われる盆踊りに浴衣を着て参加する。男の子であれば、はっぴとはちまき姿で神輿をかつぐこともある。年の後半は、中秋節（陰暦8月15日の月見）や重陽節（陰暦9月9日）も祝えば、七五三やクリスマスなども大切なイベントだ。千歳飴も欠かせなければ、クリスマスシーズンには、家にツリーが飾られ、サンタさんののっているケーキを食べ、パーティーをする。きわめて一般的な、華僑華人の子ども、そして華僑華人家庭の一年の流れである。

世代を越えての継承

確かに、華僑華人たちは、陰暦と陽暦ふたつの時間を生きている。しかし、世代が重なるにつれ、そして日常で使われる暦が陽暦を基本としているため、若い世代の華僑華人のあいだでは「陰暦離れ」が進んでいるのも確かだ。それは、誕生日からみてとれる。華僑華人の1世や2世たちはしばしば陰暦と陽暦双方の誕生日を覚えているが、基本的に陰暦の誕生日を祝っている。しかし、新しい世代の華僑華人たちは陽暦で祝うのが通例で、陰暦の誕生日を把握していないことがある。1世2世からすれば、陰暦の時間は比較的身近であるのに対し、新しい世代の華僑華人にとっては、自分との繋がりよりも「家族の行事」を行う時間として捉えられているのではないかと思う。家族と同居していなかったり、家族が陰暦に合わせて中国の伝統行事を行わなければ、その暦を意識することもない。逆に、相当意識の高い人でなければ、祭りの意味や祭り方を学び、それを実践し、そして後世に伝えることもないだろう。

近年では、横浜、神戸、長崎など古くからある華人コミュニティの観光地化により、陰暦に合わせて中国の伝統的な祭事が街の大きなイベントとして行われるようになった。その結果、陰暦離れしていた世代が、祭りに加わることを通じ、再度陰暦への認識と理解を深めているように思える。そういった意味では、暦とそこに内包されている文化を生かし、継承していくためには、時間だけでなく、空間、つまり文化を実践する環境作りが大切であるように思う。